

(様式第1号)

新規調査研究計画書(全体計画)

調査研究課題	ダイズ加工食品からの遺伝子組換え体(GMO)検知法の検討
計画期間	平成18年度～19年度 2年間
背景 必要性	遺伝子組換え食品(遺伝子組換え農産物およびその加工食品)は、平成13年4月から表示が義務化され、遺伝子組換え体(GMO)を使用した場合や、GMOと非遺伝子組換え体(non-GMO)の分別生産流通管理(IPハンドリング)がされていない場合には、その旨を表示する必要性が生じた。しかし、依然として消費者には遺伝子組換え食品に対する根強い不安感が存在するため、適正な表示が行われていることを監視し食の安全・安心を確保することが望まれる。
目的	現在、遺伝子組換え食品の検査はPCR法、ELISA法等により行われている。しかし、加工食品では検知対象であるDNA及びタンパク質の分解が生じると考えられ、検出感度、定量精度の低下が懸念される。そこで、遺伝子組換え作物の中で最も多く栽培されているダイズの加工食品についての試験法を検討して確実な検知を可能とし、食の安全・安心確保に寄与することを目的とする。
計画内容	<ol style="list-style-type: none">1. 種々のダイズ加工食品からDNA抽出を行い、定性試験、定量試験に用いるために適する純度での高回収が可能な条件を検討する。2. PCR法を用いた定量、ELISA法を用いた定量の比較を行い、ダイズ加工食品に適する定量法を検討する。3. 上記1、2の検討結果を用い、県内に流通しているダイズ加工食品に関して遺伝子組換え食品流通の実態調査を行う。
研究目標	ダイズ加工食品について、適切な検知法を用いたGMOの使用実態調査を行うことにより、食の安全性・安心感向上に貢献しうる。 また、トウモロコシ加工食品等においても、加工過程におけるDNA、タンパク質の分解が問題となっている。他品種を用いた遺伝子組換え食品の検査を行う際にも本研究の成果が役立つと考えられる。
実施上の 課題及び 対応	

(様式第2号)

平成18年度調査研究計画書(年度別計画)

調査研究 課 題	ダイズ加工食品からの遺伝子組換え体(GMO)検知法の検討
目 的	<p>加工食品において GMO 使用の有無を調査する際、定性試験、定量試験のいずれにおいても DNA 又はタンパク質の分解が問題となる。特に、ダイズ及びトウモロコシ穀粒では、適切に分別生産流通管理(IP ハンドリング)を行った非遺伝子組換え体(non-GMO)においても、流通の過程で意図しない遺伝子組換え体(GMO)混入の可能性があるため、非意図的な混入が5%を超えない場合には表示の義務がない。そのため、表示の適正を確認するためには、定量試験の精度が求められる。</p> <p>そこで、本研究では、ダイズ加工食品を用いた定性試験、定量試験の条件を確定することを目的とする。</p>
調査研究 内 容	<ol style="list-style-type: none">1. 種々のダイズ加工食品から DNA 抽出を行い、定性試験、定量試験に適する回収率・純度が可能な方法を検討する。2. PCR 法を用いた定量、ELISA 法を用いた定量の比較を行い、ダイズ加工食品に適する定量法を検討する。
備 考	